

# 幼児の嗜好する色彩特徴

森 俊夫, 齋藤益美, 梶浦恭子

家政学部生活科学科生活科学専攻

(2010年9月15日受理)

## Color Features Preferred by Infants

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MORI Toshio, SAITO Masumi and KAJIURA Kyoko

(Received September 15, 2010)

### I. 緒言

色に対する最も基本的な評価感情は、好き—嫌いである。好き—嫌いという感情は、色に限らず、個人の生活史や環境によって強く規定され、色を見たとき、何を連想するかが決め手となることがある<sup>1)</sup>。色には、人それぞれの好みがあり、好ましい程度も一様ではなく、特に好まれる色と好まれない色とがある。この色の好悪の感情を色彩嗜好といい、幼児の造形活動の際に表現される色彩の選択に大きな影響を及ぼす。色の嗜好性は幼児を取り巻く環境や性差など様々な要因によって影響を受ける。幼児であればあるほどに感覚の赴くままに色を選ぶ。つまり既成概念が少ない分、色は感情をストレートに反映する<sup>2)</sup>。特に、コンピュータ時代に生まれた子どもたちは、カラーの画面から発する多彩な色や、高輝度なテクノカラーに、普段から慣れ親しんでおり、色彩感覚も感性も変化してきていると思われる。

色の好みは、品物の色に何色が使われているかによっても大きく影響を受け、個人差も加わって不安定要素が多い<sup>3)</sup>。これまで、幼

児に関する色彩嗜好の調査は少なく、抽象的な色について幼児の色彩に対する嗜好性の特徴を明確にした研究は極めて少ない<sup>4)</sup>。そこで本研究では、幼児の色彩の嗜好性を調査し、嗜好性と嫌悪性との関連から嗜好性の特徴を明確にすることを目的とする。

### II. 方法

#### 1 試料

##### (1) 16色の色見本の作成

Photoshopに与えられているHBSカラーモデルの色相環を基準に色相角を30°ごとに分類し、12種類の基本色相を作成した。われわれが見るあらゆる色は11個のカテゴリカル色(赤, 黄, 緑, 青, オレンジ, パープル, ピンク, 茶, 白, 灰, 黒)に分類することができることが報告されている<sup>5)</sup>。このカテゴリカル色11色の中には、基本色相の7色が(赤, 黄, 緑, 青, オレンジ, パープル, ピンク)が含まれており、残りの4色(茶, 白, 灰, 黒)を基本色相12色に加え、16色で試料を作成した。表1には、試料の色彩条件を示した。

表1 試料の色彩条件

試料番号	色名	色相角 (H°)	明度 (B%)	彩度 (S%)
R	赤	0	100	100
RY	橙	30	100	100
Y	黄	60	100	100
YG	黄緑	90	100	100
G	緑	120	100	100
GC	青みの緑	150	100	100
C	シアン	180	100	100
CB	緑みの青	210	100	100
B	青	240	100	100
BM	青紫	270	100	100
M	紫	300	100	100
MR	赤紫	330	100	100
BR	茶	35	96	35
BK	黒	0	0	0
W	白	0	0	100
GL	グレー	0	0	50

表2 各試料の明度・彩度の詳細

試料番号	明度 (%)	彩度 (%)
①	100	100
②	100	80
③	100	60
④	100	40
⑤	100	20
⑥	80	100
⑦	60	100
⑧	40	100
⑨	20	100
⑩	80	80
⑪	60	60
⑫	40	40
⑬	20	20
⑭	0	0
⑮	0	80
⑯	0	60
⑰	0	40
⑱	0	20

(2) 明度・彩度を変化させた色見本の作成

表2は、明度と彩度を20%ずつ変化させ、有彩色は13種類、無彩色を5種類に分類したものである。

2 色彩嗜好の対面調査

色見本16色を提示し、被調査者に好きな色、嫌いな色を評価させた。愛知県一宮市内のK幼稚園の幼児64名(年少児31名、年長児33名)を選び、プリントアウトされた各色見本を見て個々の視覚的認識に基づいて好きな色1色、嫌いな色1色を選択させ、好きな色には○嫌いな色に×を記入させた。さらに、最も好きな色については、同一色相のトーンを変化させた13色(有彩色)、5色(無彩色)の中から1色を選択させた。

Ⅲ 結果と考察

1 色彩の嗜好性の官能評価

(1) 年少児の場合

表3には年少児の色相の嗜好性に対する官能評価の結果を色相角別に好きな色、嫌いな色を男児、女児、全体に分けてまとめた。表4と5には嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響の官能評価結果を男児、女児、全体に分けてまとめて掲げた。

年少女児については調査対象者(9名)が少なかったが、赤色や橙色といった暖色系のほうがわずかながら好まれる傾向が見られる。嫌いな色については、白が最も多く有彩色よりも無彩色の色が選択されている。年少男児については赤色と黄色を選択したものが最も多く男児も同様、暖色系の色が好まれるといえる。嫌いな色ではシアンが最も多く選ばれており、寒色系や無彩色の色が選択され

表3 色相に対する嗜好性 (年少児)

色相角 (°) 年少児	好きな 色(女)	嫌いな 色(女)	好きな 色(男)	嫌いな 色(男)	好きな 色(全)	嫌いな 色(全)
0	16.7	0.0	24.0	0.0	22.6	0.0
30	16.7	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0
35	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
60	16.7	0.0	24.0	8.0	22.6	6.5
90	0.0	33.3	4.0	0.0	3.2	6.5
120	0.0	0.0	0.0	4.0	0.0	3.2
150	0.0	0.0	12.0	8.0	9.7	6.5
180	16.7	0.0	4.0	24.0	6.5	19.4
210	0.0	0.0	8.0	4.0	6.5	3.2
240	0.0	0.0	4.0	0.0	3.2	0.0
270	0.0	0.0	8.0	0.0	6.5	0.0
300	16.7	0.0	4.0	20.0	6.5	16.1
330	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
B	0.0	0.0	0.0	12.0	0.0	9.7
W	16.7	50.0	8.0	16.0	9.7	22.6
G	0.0	16.7	0.0	4.0	0.0	6.5
合計	100	100	100	100	100	100

表4 嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響 (年少児  
男・女)

年少女	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		0				0
40			0			0
60				0		16.7
80					0	16.7
100		16.7	16.7	0	16.7	16.7
年少男	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		8				8
40			4			8
60				0		0
80					4	8
100		0	0	8	0	52

表5 嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響 (年少  
児全体)

年少児	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0.0					
20		6.5				6.5
40			3.2			6.5
60				0.0		3.2
80					3.2	9.7
100		3.2	3.2	6.5	3.2	45.2

る傾向にある。年少児全体については、赤色と黄色が最も多く好まれ、暖色系の色が好まれることがわかる。嫌いな色については白色が最も多く、無彩色で4割強を占めている。これらのことから、年少児は男児、女児ともに暖色系が好まれ、寒色が好まれないという特色が明確に結論できる。

明度・彩度変化による嗜好性については年少女児の場合、高彩度・高明度のものが多く選択されている。年少男児の場合、彩度・明度が100%のものが一番好まれている。また、明度よりも彩度の変化による影響が強く表われ、高彩度のものほど好まれるという結果が得られた。女児の場合と違い、低彩度・低明度のものも選択されている。年少児全体の場合は、彩度・明度が100%のものが一番好まれている。また嗜好性に及ぼす彩度の影響は明度よりも大きいことが見出された。

(2) 年長児の場合

表6には年長児の色相の嗜好性に対する官能評価の結果を色相角別に好きな色、嫌いな色を男児、女児、全体に分けてまとめた。表7と8には嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響の官能評価結果を男児、女児、全体に分けて掲げた。

年長女児については黄色が最も好まれるが、シアンや紫色などの中性色が好まれる傾向に選択されている。年長男児については青

表6 色相に対する嗜好性 (年長児)

色相角 (°) 年長児	好きな 色(女)	嫌いな 色(女)	好きな 色(男)	嫌いな 色(男)	好きな 色(全)	嫌いな 色(全)
0	7.1	14.3	15.8	10.5	12.1	12.1
30	7.1	0.0	5.3	5.3	6.1	3.0
35	0.0	7.1	0.0	5.3	0.0	6.1
60	28.6	0.0	10.5	0.0	18.2	0.0
90	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
120	0.0	7.1	5.3	0.0	3.0	3.0
150	0.0	0.0	5.3	0.0	3.0	0.0
180	14.3	0.0	5.3	5.3	9.1	3.0
210	0.0	0.0	10.5	0.0	6.1	0.0
240	7.1	7.1	26.3	0.0	18.2	3.0
270	7.1	21.4	5.3	0.0	6.1	9.1
300	21.4	7.1	5.3	26.3	12.1	18.2
330	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
B	0.0	28.6	0.0	42.1	0.0	36.4
W	7.1	0.0	5.3	5.3	6.1	3.0
G	0.0	7.1	0.0	0.0	0.0	3.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表7 嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響 (年長児男・女)

年長女	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		0				0
40			0			0
60				0		0
80					14.3	0
100		14.3	7.1	14.3	21.4	28.6
年長男	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		0				0
40			0			0
60				5.3		15.8
80					5.3	10.5
100		10.5	5.3	5.3	10.5	31.6

表8 嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響 (年長児全体)

年長児	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0.0					
20		0.0				0.0
40			0.0			0.0
60				3.0		9.1
80					9.1	6.1
100		12.1	6.1	9.1	15.2	30.3

色がある。嫌いな色については、黒色や青紫色が多く選ばれ、寒色系の色が好まれていた。嫌いな色では、女兒と同様黒色が最も選ばれ、無彩色の色で5割弱を占めている。次いで青紫色が選択されている。年長児全体については、黄色と青色が最も多く、赤色や緑色も多いことから、基本色相が好まれると結論できる。嫌いな色については黒色が最も多く、無彩色で4割強を占めていることから暗くて重いイメージのものが嫌われると考えられる。

明度・彩度変化による嗜好性については年長女兒の場合、高彩度・高明度のものが多く選択されている。また、嗜好性に対しては明度よりも彩度の影響が強くと表われ、彩度が高くなるにつれて好みが増大することがわかる。年長男児の場合も、高彩度・高明度のものが多く選択されている。年長児全体の場合では、彩度・明度が100%のものが一番好まれ、高彩度・高明度のものが好まれる。また好みに対しては明度よりも彩度による影響が強いと結論できる。

(3) 幼児全体の場合

表9には幼児の色相の嗜好性に対する官能評価の結果を色相角別に好きな色、嫌いな色を男児、女兒、全体に分けてまとめた。表10と11には嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響の官能評価結果を男児、女兒、全体に分けて掲げた。

表9 色相に対する嗜好性 (幼児)

色相角 (°) (幼児)	好きな 色(女)	嫌いな 色(女)	好きな 色(男)	嫌いな 色(男)	好きな 色(全)	嫌いな 色(全)
0	10	10	20.5	4.5	17.2	6.3
30	10	0	2.3	2.3	4.7	1.6
35	0	5	0.0	2.3	0.0	3.1
60	25	0	18.2	4.5	20.3	3.1
90	0	10	2.3	0.0	1.6	3.1
120	0	5	2.3	2.3	1.6	3.1
150	0	0	9.1	4.5	6.3	3.1
180	15	0	4.5	15.9	7.8	10.9
210	0	0	9.1	2.3	6.3	1.6
240	5	5	13.6	0.0	10.9	1.6
270	5	15	6.8	0.0	6.3	4.7
300	20	5	4.5	22.7	9.4	17.2
330	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0
B	0	20	0.0	25.0	0.0	23.4
W	10	15	6.8	11.4	7.8	12.5
G	0	10	0.0	2.3	0.0	4.7
合計	100	100	100.0	100.0	100.0	100.0

表10 嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響 (幼児男・女)

幼児女	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		0				0
40			0			0
60				0		5
80					10	5
100		15	10	10	20	25
幼児男	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		4.5				4.5
40			2.3			4.5
60				2.3		6.8
80					4.5	9.1
100		4.5	2.3	6.8	4.5	43.2

表11 嗜好性に及ぼす明度・彩度の影響 (幼児)

幼児	彩度 (%)					
明度 (%)	0	20	40	60	80	100
0	0					
20		3.1				3.1
40			1.6			3.1
60				1.6		6.3
80					6.3	7.8
100		7.8	4.7	7.8	9.4	37.5

幼児女児については黄色が最も嗜好性が高く、赤色や橙色よりもシアンや紫色の中性色が好まれる傾向にある。嫌いな色については、黒色や白色のような無彩色が多く選択される。幼児男児の嗜好性については赤色、黄色、青色の順であり、基本色相が好まれる傾向にある。嫌いな色については、黒色と紫色が多く、女児と同様、無彩色の色が多く選択されている。幼児全体については、好きな色では、黄色、赤色、青色の順に多く、基本色相が好まれている。嫌いな色については黒色が最も多く、無彩色で4割強を占めていた。

明度・彩度変化による嗜好性については女児の場合、高彩度・高明度のものが多く選択されている。また、明度よりも彩度が変化したものを好むという結果が得られた。男児の場合も、高彩度・高明度のものが多く選択されている。他の場合と違い、明度と彩度の両方の変化にも影響され、明度も彩度も高くなるにつれて、嗜好性が増大する。幼児全体の場合は、彩度・明度が100%のものが一番好まれ、高彩度・高明度のものが好まれると結論できる。また明度よりも彩度が変化したものを好むという結果が得られた。

これらの結果から、“子どもっぽさ”には明るく、澄んで、陽気なイメージが伺われる。

千々岩が20ヶ国における色相の嗜好性について調査を行った結果、あざやかな色を好む日本、白や明るい色を好む中国、暗くにぶ

い色を好む欧米の3パターンが存在すると指摘している<sup>6)</sup>。近江による1990年代の日本人を対象としたサンプリング調査の結果から、明るい色、あざやかな色は好まれ、暗い濁った色は嫌われることが見出されている。また、紫色は、好まれにくく、赤、黄、緑、青などの基本色相に比べ、中間色相は好まれにくいことが、現代日本人の特徴であると指摘している<sup>7)</sup>。

年齢別にみると、若者のほうが、明るくあざやかな色を好みやすいと報告されている。子どもはもっぱらあざやかな色に反応するが、これは生物としての自然な姿であり、加齢とともに暗い色やにぶい色への好みは増すと考えられる。加齢の効果としては集中から分岐への変化があげられる。若者の好みは特定の色に集中しやすいが、高齢になると様々な色に好みが多岐する。

子どもにたくさんの色紙を与えて似た色を集めさせると、まず赤系、黄系、緑系といった色相を基準にする。明暗、濃淡に気を配るのは、ある程度発達したのちのことである。色の世界は3次元で構成されているが、色が優先し、明度・彩度は副次的になりやすい。

幼児の好きな色で赤色、黄色、青色が多く選択されている背景には、テレビの〇〇レンジャーといった戦隊系の番組の影響も関係しているように考えられる。特に男児の好きな色で多く選択されていることからヒーローに対する憧れが色の選択に影響しているように推測される。

## 2 幼児の色彩に対する嗜好性の分散分析

幼児の色彩の「好き」「嫌い」について色彩の種類(α)性差(β)を主要因とする繰り返しのない二元配置より分散分析(F検定)を行った結果を表12に示した。「好きな色」の場合、色彩の種類については、年少および

幼児全体では、危険率5%において有意差が認められた。性差については、幼児全体で危険率1%において有意差が認められた。「嫌いな色」の場合、色彩の種類については、年長では、危険率1%において有意差が認められた。性差については、年少、年長、幼児全体において有意差が認められなかった。したがって、年少児では「好きな色」において年長では「嫌いな色」において色彩の影響を受けることがわかった。また、幼児全体についてみると「好きな色」では、色彩の種類および男女の違いによる影響を受けることが見出された。幼児全体では「嫌いな色」に関して色彩の種類および男女の違いによる影響は見出されなかった。

表12 分散分析の結果(男女の違い)

主要因	好きな色			嫌いな色		
	年少	年長	全体	年少	年長	全体
色彩の種類(α)	2.63*	1.86	2.85*	1.26	4.24**	1.9
性差(β)	0	0	0**	0	0	0

幼児の色彩の「好き」「嫌い」について色彩の種類(α)年齢差(β)を主要因とする繰り返しのない二元配置より分散分析(F検定)を行った結果を表13に示した。

表13 分散分析の結果(年齢の違い)

主要因	好きな色			嫌いな色		
	男	女	全体	男	女	全体
色彩の種類(α)	2.73*	6.89**	4.86**	2.41*	0.63	1.39
年齢差(β)	0	0	0	0	0	0

「好きな色」の場合、色彩の種類については、男児では、危険率5%において、女児および幼児全体では危険率1%において有意差が認められた。年齢差については、年少、年



長, 幼児全体において有意差が認められなかった。「嫌いな色」の場合, 色彩の種類については, 男児では, 危険率5%において有意差が認められた。年齢差については, 年少, 年長, 幼児全体において有意差が認められなかった。したがって, 男児では「好きな色」と「嫌いな色」において女児については「好きな色」において色彩の影響を受けることがわかった。また, 幼児全体についてみると「好きな色」では, 色彩の種類による影響を受けることが見出された。幼児全体では「嫌いな色」に関して色彩の種類および男女の違いによる影響は見出されなかった。

#### IV 結論

幼児の発達において色彩感覚は感性に非常に大きな影響を及ぼすことから, 幼児の色彩の嗜好性について調査し, 色彩の嗜好率と嫌悪率の関係を分析した。以下に得られた結果を結論としてまとめた。

色彩の嗜好性の官能評価より, 幼児は明るい色を好み, 暗い色を嫌う傾向が見られた。彩度・明度が100%のものが一番好まれ, 高彩度・高明度のものが好まれるという結果が得られた。また明度よりも彩度に嗜好性が影響される傾向にある。色に関していえば幼児は赤, 黄, 青といった基本色相が特に好まれることから“子どもっぽさ”には明るく, 澄んで, 陽気なイメージが伺われる。

幼児の色彩に対する嗜好性の分散分析では, 影響が見られたものは, 幼児全体の「好きな色」での色彩の種類および男女の違いによる影響, 男児全体の「好きな色」と「嫌いな色」において女児全体の「好きな色」において色彩の影響があった。これらもごくわずかな影響であり, 際立って年齢や性別の違いによる影響は見出されなかったことから, 年齢や性別による色彩の嗜好性の違いはあまりないと推察される。低年齢では, 好みが特定の色に集中するが, 加齢とともに多様化する傾向が見られた。

#### 文献

- 1) 川上元郎, 児玉晃, 富家直, 大田登: 色彩の事典, 朝倉書店, p263~264 (1995)
- 2) 名張淑子: 絵に映された心のSOS, 同朋舎, p53~70 (1996)
- 3) 末永蒼生: 色彩心理の世界, PHP研究所, p98~107, 202 (1998)
- 4) 鈴木千恵子: 色の好き・きらい, 誠文堂新光堂, p27~32 (2005)
- 5) Uchikawa, k., and Boynton, R. M.: Categorical Color Perception of Japanese Observers, *Vision Res.*, 21, 1825-1833 (1981)
- 6) 千々岩英彰: 色彩学概説, 東京大学出版会, p171 (2002)
- 7) 近江源太郎: 色彩心理学入門, 日本色事業研株式会社, p56~69 (2007)